



ごほんぞん

ご本尊

アフターケア通信

9

月号

秋のお彼岸

ご縁に出会う大切な行事

コラム

この仏具、知っていますか？

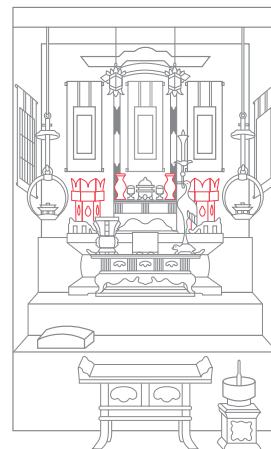
お内仏のお飾り

ご本尊の前には三具足(花瓶・香炉・燭台)をお備えしていると思います。これ以外にも大切な仏具はあり、今回はその中でも、「名前は？」「何に使うの？」という質問が多い二つを紹介します。



花瓶(けびょう)

水を備える器です。常にきれいな水にして、花ではなく、しきみしきみや青葉のものを挿します。



供筒(くげ)

普段は使用せずにご法事やお彼岸、報恩講などの行事のときに、けそく華束(小餅もしくは落雁)を盛ります。

表紙イラスト「華立て」

…生花を用い、四季折々の木花・草花を挿します。



今月の門徒さん

「お念仏のご利益」

瀬戸山 慧子さん (鹿児島組 願生寺)

よく「お寺にお参りして何のご利益があるの？」と問われて、返答に困ってました。あるときのお彼岸法要で「現生げんしょう十種の益」という「お念仏のご利益」の教えを聴聞し、無性に浮き浮きしました。

秋彼岸の頃の鹿児島は、残暑が厳しいにも関わらず、暑さを忘れて聞き入ってしまい、ご法話が終わると「ありがとう」と感謝の言葉が自然と出てきました。

今後も教えに出あい続け、いつか同朋と「お念仏のご利益」を語り合う日が来ることを念じつつ帰路に着きました。彼岸花が夕日に染まっていました。



「聞く」だけでなく、「語り合いたい」という姿勢から、出あい続けるということの大事さを教えていただきました。

kyushu-kyoku

九州教区



発行：真宗大谷派 九州教区教化委員会

〒830-0038 福岡県久留米市西町 540-1 TEL.0942-32-3056

秋のお彼岸



彼岸と此岸

春と秋のお彼岸というと、お墓参りやお寺参りを思い浮かべる方が多いでしょう。なかには、彼岸を亡くなった人々の世界と思う方もいるかも知れません。

もともと「彼岸」という言葉は、お釈迦さま当時の言葉でパーラミタ(波羅密多)から来ていて、中国で「到彼岸」と訳されました。

迷いの世界を「此岸」というのに対し、それを超えたさとりの世界、浄土真宗では阿弥陀仏の浄土を表す仏教語です。その「浄土」は私たちが還っていく世界であると同時に、此岸(迷いの世界)に生きる私たちに「あなたは何を尊いこととして生きていますか？」と問いかけてくる世界です。

ご縁に出あう

真宗門徒は、お彼岸にはお墓で先祖のためにお参りするだけでなく、私たち自身が仏法のご縁に出あってほしいと語り継いできました。この此岸を生きる限り、誰であっても

迷ったり、苦しんだりするもので、せつかく人間として生まれたからには、仏法によって本当の満足を求めなさいと、私たちに教えてくれるのでしよう。

そのように考えると、お墓参りは故人の成仏を祈る追善供養ではなく、阿弥陀仏の恩徳をたたえ、私たちを仏さまの世界へ導いてくださる亡き人(諸仏)をたたえるためのものなのでしよう。



お彼岸の過ごし方

古くから日本では、春・秋の太陽が真西に沈むすがたを見ることによって、浄土を想うという伝統から「彼岸会^{ひがんえ}」という仏教行事を営んできました。

本願寺八代の蓮如上人は「昼夜の長短なくして、暑からず寒からず、(中略)仏法修行のよき節」とお

手紙に書いています。ここでいう修行とは、亡き人を偲び、亡き人を通して、私たちが仏法に遇^あっていただくことなのでしょう。過ごしやすくなるこの時期、多くのお寺ではお彼岸の法座が開かれています。この機会に聞法の場へ参加してみてくださいいかがでしょうか。